

世阿弥と満濟

松岡心平

醍醐寺の僧満濟(一二七八—一四三五)といえ、**「黒衣の宰相」というイメージが強く、能楽史との関わりでは、『満濟准后日記』の芸能記事が利用されるくらいですまされてきた。**

世阿弥との関係でも、世阿弥の醍醐寺清滝宮楽頭職の獲得(応永三十一年四月十七日条)や、世阿弥父子の仙洞御所出演の差し止め(永享元年五月十三日条)や、細川奥州の若党らとの世阿弥父子の室町御所での演能(永享四年一月二十四日条)などの重要な案件が『満濟准后日記』に書き留められてゐる割には、満濟本人の能楽との関わりや世阿弥との関わりについて、ほとんど語られてこなかった。

それには理由がある。満濟自身が生真面目なタイプで、それほど芸能に肩入れする人間ではなかったからである。なにしろ当人は、猿楽の流行について、足利義教の観世元重(音阿弥)びいきを念頭におきながら「猿楽が盛んなのはもったいないことだ」などと管領に伝えたりする人物であった(正長元年六月十七日条)。この条の解釈については竹本幹夫訳注『風姿花伝・三道』四〇五頁を参照した。もつともこのとき、満濟は、鷹の流行については、よろしくないと言つてその同意をとりつけたものの、肝心の猿楽の流行についての苦言は直接義教に述べなかつたようである。満濟は芸能に熱を上げるタイプではなかつたが、それでも満濟の地位、醍醐寺三宝院門

跡および醍醐寺座主という地位が、芸能との関わりを余儀ないものにしてゐた。

三宝院は、門跡賢俊(一二九九—一三五七)が足利尊氏の護持僧として信任を得、政僧と言つていくらいの活躍をして以来、満濟の代に至るまで、室町將軍の政治のみならず芸能の面においても、大きな役割を果たすトポスとして機能しつづけたのであった。

観阿弥・世阿弥父子も醍醐寺での演能を足がかりとして世に出たのである。

満濟の師でもあり補佐役でもあった隆源(一二四一—一四二五)は、世阿弥が清滝宮の新楽頭となり楽頭始めの能を舞つたことを聞き及んで、次のような世阿弥・観阿弥についての貴重なコメントを、その日記に書きつけてゐる。

この観世入道(世阿弥)、親の観世(観阿弥)、光濟僧正の時、当寺に於て七カ日の猿楽、それ以後、名譽にして京辺に賞翫されおはんぬ。今の観世入道(世阿弥)、その時小兒に劣らず上手、名譽の者なり。これまた親に劣らず上手、名譽の者なり。今、子供三人、またもつて上手なり。声譽ある三代の猿楽なり。名望相統して、今年この寺の楽頭となること、珍重と謂ふべきと云々。

『醍醐寺新要録』所引『隆源僧正日記』
 応永三十一年四月二十日条

世阿弥が新楽頭となつたと聞いて、隆源には五十年前の猿楽の記憶が鮮やかによみがえつた。賢俊僧正を継いだ光濟僧正が三宝院門跡であつた(応安五〇七(一二七二)―七四年頃)のこと、醍醐寺で観阿弥を主演者とする七日間の猿楽が催され、そこで当時十歳くらいの子供であつた世阿弥が「異能を尽くし」て演じたことが、なつかしく思い出されたのである。この「七カ日の猿楽」の後、観阿弥たちが「京辺に賞翫」されたというのは、永和元年(一二七五)の今(新熊野猿楽を指しているだろう)。当時、新熊野社は三宝院と密接な関係にあり(表章『観世流史参究』「観阿弥の周辺二題」、小川剛生「世阿弥の少年期(下)」―醍醐寺と新熊野社、『観世』二〇一三年五月号)などを参照)、光濟僧正や覚王院末縁(新熊野社別当)らがおせん立てをした今熊野猿楽で將軍足利義満の台覧を得た観阿弥一座は、これを契機に一気にブレイクしたのであった。

満濟はまだこのとき生まれしていない。しかし、二条家の傍流、二条基冬の子である満濟と三宝院との縁は、早くに訪れた。満濟は、応永二年(二二九五)、十八歳で三宝院門跡となり、ついで同年中に醍醐寺座主となつたのである。天皇や摂関家の子息でもない満濟に、なぜこのような破格な待遇が用意されたのか。もちろん、満濟の「満」の字からも、足利義満の強力なバックアップが予測できる。小川剛生氏は、この間の事情にさらに踏み込み、破格な扱いは満濟が義満の寵童であつたからだと、次のように述べる。

満濟の得度の年月や師承も実は明らかでなく(灌頂を受けるのは門跡継承後)、賢俊・光濟・光助・定忠と、日野氏一門に独占されてきた三宝院門跡に、何のゆかりもなかつた満濟を押し込み、かくも手

厚い庇護を与え続けたことからは、ちやうど稚児が「落飾の事、十七若しくは十九をもつて、その年限を定むべきなり」(右記)という一般的な考えを併せてみても、満済の前身が、義満が側近くに置いた児であつた可能性は頗る高いように思われる。(『足利義満』一四二頁)

また小川氏によれば、足利義満は応永二年に出家して以来、取り巻きとして青蓮院尊道親王や聖護院道意(二条良基の息)らを重用しており、応永六年から、これに三宝院満済が加わる(『足利義満』二三八頁)。応永二年からの四年間は満済にとつて文字通りの修業期間であり、三宝院内部の足場固めの時期だったのである。

そして、応永六年四月二十九日に、義満は尊道や道意らとともに満済の三宝院を訪れ、そこで世阿弥の能を見たのであつた。内裏の懺法講をさぼつての出御であつた。これは東坊城秀長の『迎陽記』に書かれているが、秀長はかつて二条良基の家礼であり、知り合いである良基の息子の道意から棧敷の席があるからと(あるいは満済から直接に)招かれたのである。原文を掲げておこう。

晴、今日於三宝院有猿楽觀世世阿弥、室町殿(足利義満)御見物。青蓮院宮(尊道親王)・聖護院門主(道意)等御参会云々。十番逸興也。有棧敷之由示給之間、罷向見物。実相院僧正(増珍)以下济々参会。於水本僧正(隆源)部屋、有心補氣、有世卿(安倍有世)参会了。

満済の三宝院での世阿弥の演能は、足利義満にとつて、かつて自らの寵童であつた人間たちが、一人は三十半ばの盛りの役者として、一人は仏教界の二十代の若いリーダーとして成長した晴れ姿を見るうれしい機会だつたに

ちがいない。さらにこのときの世阿弥は、一カ月後に勸進猿楽をひかえていた。五月二十日(棧敷は赤松義則が担当)、二十五日(管領畠山基国が担当)、二十八日(細川満元が担当)の三日にわたつて一条竹鼻で催された、足利義満が直接に後援する勸進猿楽である。四月二十九日の演能は、その予行演習であつた可能性もあるだろう。

後年、將軍足利義教が三宝院を訪問した際に、満済が金剛輪院で催した観世元重による十一番の演能は(『満済准后日記』永享二年四月二十三日条)、応永六年四月二十九日の世阿弥の演能を意識したものであつた。

というのは、足利義教は、將軍が後援する観世元重の初めての勸進猿楽(永享五年紀河原勸進猿楽)でも、足利義満が後援した世阿弥の初めての勸進猿楽(応永六年一条竹鼻勸進猿楽)をはつきり意識しているからである。そのことを示す記事が、『満済准后日記』永享五年(一四三三)二月二十七条にみえる。

將軍(足利義教)、壇所に渡御す。永円寺勸進造宮の爲の申樂、鹿苑院殿(足利義満)の御代に北山牛御堂東に於てこれあり。彼の時の棧敷御支配の様、鹿苑院殿、御自筆を以て棧敷絵図を置き遊ばさる。古本、永円寺より召し出ださる。一見せしむべきの由、仰せ出だされ、御隨身す。この儀、今度の御棧敷御支配の爲と云々。珍重々々。御雑談、数刻に及びおはんぬ。

室町御所で祈禱している満済のところへ足利義教が足を運び、満済に見せたのは、永円寺で見つかった足利義満の時の勸進猿楽の棧敷割り振り図であつた。義満自らが筆をふるつたものである。義教は、これを手本にして来る五月の観世元重の勸進猿楽の棧敷の割り振りをするのでとして、満済と数時間にわた

って話し込んでいた。

この足利義満の勸進猿楽を一条竹鼻勸進猿楽と解し、それが永円寺造宮のためであり、一条竹鼻の場所についても新見解を打ち出したのが細川武稔氏の「足利義満の北山新都心構想」(『中世都市研究』15、二〇一〇年)であるが、「牛御堂東」についての解釈に若干疑問は残るものの、大むね正しい見解と思われる。『迎陽記』には一条竹鼻勸進猿楽への満済出席の記述はないが、満済も当然見に行つていただろう。義教は、観世元重の初めての將軍後援勸進猿楽を成功させたい一心で、義満の自筆棧敷絵図を見せながら、その時の猿楽を経験した満済に意見を求め、それが数時間に及んだのであつた。

応永三十一年の時点で、清滝宮新樂頭に世阿弥を選任したのは、明らかに満済の判断であつた。また永享元年の世阿弥父子の仙洞御所演能を仲介したのも満済であつた。これは足利義教の意向でつぶされ、また翌年には、「室町殿より内々仰せ挙げらるるに依てなり」(『満済准后日記』永享二年四月十七日条)という義教からの内々の強い要請によつて、満済は清滝宮樂頭を世阿弥から観世元重に替えざるを得なかつた。芸能の局面で、権力者に対して決して自己主張をしないのが満済のスタンスではあるが、満済が足利義満時代からのなじみの役者世阿弥に好意的であつたことは確かだろう。この態度は、永享四年の義教御前での、細川奥州の若党らとの世阿弥父子の共演への仲介にまでつながつていくと思われる。この催しが満済の仲介で成り立つたことは、翌日の日記(二月二十五日条)での、細川右京大夫、細川奥州らの満済への御礼のあいさつ伺いから判断できるのである。

(東京大学教授)